

# 柿生文化

## 近くにあった江戸時代

柿生中学校長 板倉 敏郎

私が小学校低学年の頃まで母方の曾祖母が生きていました。曾祖母は江戸時代の生まれで、私の記憶では、嘉永年間(1848年~1854年)だと聞いていますが幕末期に生まれたことは確かなようです。

曾祖母は大変勝ち気な人でしたが、たまに尋ねていくと駄菓子などよくもらって可愛がってもらいました。私は、この曾祖母から江戸時代の話をよく聞かされました。幕末の戊辰戦争(1868年)の様子や侍同士の切り合いの話などよく聞かせてもらいました。切り合いの場面を彼女は実際に見ていたらしく、それはそれは実に生々しい話でした。両者とも傷だらけで1時間以上経っても決着がつかず肩で息をしながら息を整えながら長時間にわたる戦いを続けたようでした。今の映画やテレビに出てくる切り合いの様子とはずいぶん異なっていたようです。どういう決着になったのかは残念ながら聞けませんが、どうもテレビや映画のように格好のよいものではなかったようです。ですから、映画好きであった彼女は映し出された時代劇のどこが違うとか、あんな事はなかった等の話をよく私にしてくれました。

江戸時代の話を通じて曾祖母から聞いたということは、すごく貴重で大変な体験をしたという思いがあります。日常、時代劇に出てくる江戸時代は、他人事で遠い昔の話のように思えますが、決してそんな昔の話ではないのです。たった3代か4代前の先祖の時代が江戸時代というわけです。

一方、父方の先祖の話もよく聞きました。8代前の先祖の弟が、溺れた人を助けるために川に飛び込み、溺れて亡くなってしまいました。近所の人々からは河童に足をつかまれて溺れたのだと評判になり、しばらくは川で泳ぐ人がいなくなったとのことでした。ですから私の父は、私が川や海に泳ぎにいくと言いつつかならずいやな顔をしながら「河童に気をつけろ」と昔の話をしたものでした。その話は、江戸時代の文化13年(1804年)の出来事でした。

私の子供たちは、祖先のことなどまったく興味がなく、このような話もやがては忘れられてしまうのだと思うと誠に残念でなりません。柿生には、まだ埋もれた伝承などが各ご家庭にもたくさんあると思います。きっと貴重な話もあることでしょう。

祖先の活動があったからこそ今日の私たちが存在したということは決して忘れてはいけないことだと思います。祖先の思いを知ること、きっと、私たちの生活をより豊かにしてくれることでしょう。



幕末期の漬物屋(フー・イスト誌掲載写真より)

# 「柿生に象が」

昭和2年のことです。万福寺（現、新万福寺）の才沢和蔵さんが、物置を造ろうと裏山の崖を切り崩したところ、地表下5～6メートルの所から、大きさ2～30センチの湯たんぽ状の化石を発見しました。

この化石は、今から150万年程前の鮮新世末から洪積世初期に生息していた「あけぼの象」の一種、「パラステゴゾン象」と呼ぶ象の顎（あご）と歯と判明。柿生に象が住んでいた。と大きな話題を呼びました。



（象の復元予想図）

この像は、温暖な森林地帯に生息していた小型の象といわれ、日本が大陸と陸続きだったことや、氷河期の推移、多摩丘陵の成り立ちの解明などの参考になっているそうです。

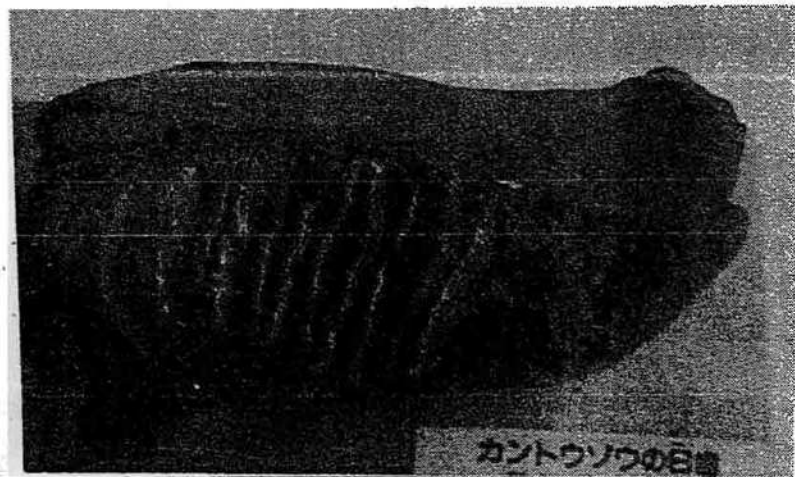
発見当初、才沢さんは得体の知れぬものに戸惑い、村役場に相談したそうです。これを聞いた岡上の教師であり郷土史家の山田和一郎氏が化石を預かり調査を始めました。和一郎氏は近郷に聞こえた郷土研究家で、最初は「マンモスでは？」と騒がれましたが、化石は、和一郎氏から、権威者である森安次郎氏の手に入り、昭和48

年川崎市重要天然記念物に指定された経緯があります。

なお、この山田和一郎氏について「柿生・岡上郷土誌」（昭和7年柿生小学校発行）は、「氏、自らを“塵外赴風院殿五十年前和一郎化石大居士”と称え、考古物蒐集（しゅうしゅう）に没頭、約1万点の珍品堂に溢る・・・」。とユニークな人柄を紹介しています。

化石は、現在も大切に生田の青少年科学館に保管展示されております。（参考「ふるさと語る」）

（文：麻生区観光協会会長・元市議会議長・元柿の実幼稚園長 小島一也氏）



発見された象臼歯の化石（青少年科学館所蔵）

絶対年代 (単位100万年)		相対年代		
いまから まえ	長さ	代	紀	世
2	2	新 生 代	第 四 紀	沖積世
27	25			洪積世
43	43			鮮新世
70	65	中 生 代	白 堊 紀	中新世
135	135			漸新世
180	180	古 生 代	ジュラ紀	始新世
225	225			三疊紀
270	270	古 生 代	石炭紀	二疊紀
350	350			石炭紀
400	400	古 生 代	デボン紀	石炭紀
440	440			シルル紀
500	500	代	オルドビス紀	カンブリア紀
600	600			カンブリア紀
		先カンブリア代		

地質時代の区分

# 史料館収蔵品紹介

なんそうさとみ はっけんでん

## 「南総里見八犬伝」 (滝沢馬琴二曲亭馬琴著) 江戸時代後期



江戸時代後期の読み本で、文化11年(1814年)から天保13年(1842年)にかけて刊行され、98巻106冊に及ぶ長編小説で当時のベストセラーでもありました。

今日も多くファンがおり、たびたび映画化やテレビ化がされています。

内容は、室町時代末期、犬塚信乃・犬飼現八・犬山道節ら名前に「犬」の字のついた8人の剣士が仁・義・礼・智・忠・信・孝・悌の文字が浮き出る玉を持ち、房総(千葉県)の里見氏を再興させる雄大かつ、波瀾万丈の筋書きを持つ大長編小説です。

「悪を懲らしめ善を助ける」という筋書きは、当時の人々から熱狂的な支持を得たようです。

作者の馬琴は28年もの歳月を費やし執筆し、完成は失明後、口述によるものでした。この時、馬琴の口述を筆記したのは、馬琴の息子の奥さんである“おみち”でした。早くに息子を亡くし、頼れるのは嫁の“おみち”しかいなかったのです。“おみち”は決して最初から字をよく書いていたわけではなく、舅(しゅうと)の馬琴に怒鳴られながらも一生懸命読み書きの練習をしたようです。もっとも彼女は随分と気の強い女性であったそうで、馬琴も頭が上がらないところがあったようです。

### 編集後記

「柿生文化」は本校の郷土資料館の情報誌であり研究誌ではありますが、基本的には、地域の文化・歴史を判りやすく、より多くの方々に知っていただきたいという考えでおります。気軽にお読みいただきたいと思っております。

第2号から、小島一也氏による、「柿生のルーツを探る」シリーズが始まりました。氏には、お忙しい中、時間を割いていただき執筆していただきます。柿生の歩みを時代を追いながらお話していただきます。どうぞ、ご期待ください。



## お知らせ

**聞かせてください** ニ「柿生文化」に掲載させていただきます

「地域に残る伝承」  
「家や地域にに残る昔からの習慣」など

## 郷土史料館「資料」寄贈のお願い

柿生中学校では、郷土資料館（仮称）設置に伴いまして地域に関する歴史的資料を探しております。ご自宅で保存されている歴史的資料でご寄贈いただけるものがございましたら柿生中学校にご連絡ください。

なお、保管・展示につきましては、管理体制のしっかりした施設で行ないますので是非ともご協力お願い申し上げます。

（内容）

- ◎近世（江戸期）・近代（明治期）の古文書・和本・道具類（小型の物）
- ◎江戸期の寺子屋・私塾で使用した教科書類・道具類
- ◎江戸期の「読み本」・「通行手形」・「検知帳、水帳」・「五人組帳」
- ◎明治・大正・昭和期に使用された教科書
- ◎明治・大正・昭和期の各種事件に関する新聞

## 第9回 「柿中カルチャーセミナー」のお知らせ

柿生・岡上に見られる石塔・板碑やお墓から地域文化の姿を浮き彫りにしますたいへん興味ある講演です。ぜひともご参加ください。

日時 平成20年9月18日（木）  
午後5時30分より

会場 柿生中学校会議室（冷房完備）

テーマ 「石造物に見る柿生・岡上の  
中世から近世初期の姿」

講師 郷土史研究家・西高津中学校講師  
中西 望介氏

※連絡・問い合わせ→ TEL 044-988-0004 柿生中学校 黒川まで

※校舎改築に伴いまして、学校にお越しの際は、徒歩の場合は、「思い出の丘」側の階段より、自家用車の場合は今までの坂道をお登りください。